

ポーランドで出会った二体の人形

田村 和子

時に小さな人形に不思議な力を感じる場合があります。命が宿っているのではと感ずることがあります。

子どもの頃、それも小学生になってから、わたしは一時、人形遊びに夢中になりました。確か小学校3、4年生の頃だったと思います。戦後の混乱から徐々に脱して日本経済が上向きの兆しを見せ始め、札幌のデパートのおもちゃ売り場に洋風の着せ替え人形が並ぶようになった時代のことです。わたしは母親に何度も何度も懇願して、そんな人形のひとつ“ミルク飲み人形”を買ってもらいました。水を入れた小さな哺乳瓶を口に押し込むと、その水は体の中の管を抜け、あつという間にお尻にあてたおむつをぬらしていました。おむつを当てたままの人形にブラウスとスカートを着せ、ビニール製の真っ赤なランドセルを背負わせたり、小さな靴を履かせたり、人形遊びは一年ほど続いたでしょうか。

中学、高校と人形とは全く関わりのない生活を過ごした後、大学生になってわたしは“童話研究会”と言うサークルに入り、今度は人形劇に夢中になりました。自分たちで手作りの人形を懸命に操ると、その人形がまるで生きていくかのように動きだし、表情を持つことがたまらない魅力でした。当時の北海道には中央の文化から隔絶された僻地と呼ばれる地域がたくさんありました。わたしたちサークル員は人形と装置をかついでそんな僻地にある小学校を訪ね歩き、目を輝かせて見入ってくれる子どもたちから逆にたくさんのエネルギーをもらったものでした。

それから40数年を経た2005年のことです。わたしは滞在中のポーランドで胸が痛くなるような二体の人形に出会いました。一体はオシフィエンチムのアウシュヴィッツ博物館展示室で見た西洋人形。もう一体はワルシャワ市内の元監獄だった建物で見た日本人形です。どちらも第二次世界大戦の渦の中に巻き込まれ、翻弄された人形でした。

出自がユダヤ人やロマであると言う理由だけで、あるいは思想信条が違っていると言う理由だけで110万人という人間がナチス・ドイツによって殺されたアウシュヴィッツ強制・絶滅収容所。そこに送られてきた人々の中には大勢の子どももいました。子どもたちは労働力にならないということで、収容所前のプラットフォームに着くや否や、ほとんどがすぐにガス室行きの列に並ばされました。

人類の負の遺産を背負う博物館としていま開放されているかつての強制収容所の展示ケースの中に

たむら・かずこ 1944年札幌市生まれ。79年より1年間クラクフ市に滞在後、早稲田大、東京外国語大、クラクフ教育大などでポーランド語とポーランド児童文学を研究。

主な訳・著書に M・ムシエロヴィチ『金曜日うまれの子』(岩波書店)、『ノエルカ』(未知谷)、J・ルドニャンスカ『ブリギーダの猫』(未知谷)、『生きのびる一クラクフとユダヤ人』(草の根出版会)、『ワルシャワの日本人形』(岩波ジュニア新書)など。岩手県金ヶ崎町在住。



一体の人形を見た時、わたしは強い衝撃を受けました。チェックのスカートを履いた人形が子どもの頃に母にねだって買ってもらったあの“ミルク飲み人形”に良く似ていたからです。頭と顔の部分は首のあたりからもげ、体の傍らに無造作に置かれていました。持ち主は何歳の少女だったのでしょうか。家族と共に平和に暮らしていた時代には少女は人形遊びに夢中だったに違いありません。突然、貨車に乗せられ、遠い異郷の地に運ばれて来た時まではその人形をしっかりと抱いていたことでしょう。黒い煙と化した少女。その少女から引き離された人形はいま、少女に代わってその無念さを叫んでいます。

ナチスが罪のない一般市民を連行して収容し、殺したのは強制収容所ばかりではありません。ワルシャワ市内には戦前に主にポーランド人政治犯、刑事犯が収監されていたパヴィヤクと言う監獄がありました。ワルシャワを占領したナチス・ドイツはこの監獄を反ナチス活動家を拘留する場所として利用しました。夫と共に美容院を経営していたカミラ・ジュコフスカもそんな市民活動家の一人で、彼女は地の利の良かった自分の店の中で反ナチス活動を呼びかけるビラや新聞のコピーをしていました。ところが密告により夫や妹たちと共に逮捕され、パヴィヤク監獄に連行されました。幸い二人の妹は間もなく解放されましたが、カミラは収監が続き、夫の方はアウシュヴィッツ強制収容所に移送され、間もなくそこで殺害されました。

逮捕当時35歳だったカミラは大のオペラ好きで、中でも戦前にワルシャワ大劇場で観た『蝶々夫人』のプリマドンナ、喜波貞子(きわ・ていこ 1902-1983)の大ファンでした。1902年に横浜で生まれた喜波貞子は18歳の時に単身ミラノに渡り、20歳の時にリスボンの劇場でデビューしました。その後、ヨー

ロoppa各地を回り、ポーランドにも来てワルシャワ、クラクフ、ポズナンで公演しています。喜波貞子演じる蝶々夫人に感動したカミラは大の日本びいきとなり、日本の小物集めが趣味となりました。

死と隣り合わせの暗い監房での日々、カミラは監獄にまぎれこんでいた味方の看守からひそかに差し入れてもらった布きれ、針金、糸を駆使し、大好きだった喜波貞子を思い出しながら日本人形作りに励みました。暗い監房で密かに手を動かしていたのはカミラだけではありません。ある囚人は差し入れの紙と鉛筆で詩を書き、絵を描き、ある囚人はハンカチに刺繍をほどこし、そうすることで誰もが生きた証を得ようとしていました。監房仲間が次々に連れ出され、処刑されてゆく中、カミラ・ジュコフスカは不安におびえながらも人形を作ることで心の安定を得ようとしたのです。ところが、人形が完成して間もなくの 1942 年5月、彼女はワルシャワ郊外の森の中に連れ出され、銃殺されました。37歳の若さでした。

黒い襟をかけた薄いブルーの着物。ちょっとだぶついた白い帯。裾には白とピンクの花柄模様。富士額に細い眉の白い顔。顔立ちは純和風と言うよりはいくぶん西洋風です。それは祖父*がオランダ人で、貞子にはヨーロッパの血も流れていたからでしょう。それでも紅を引いたように赤い口はおちょぼ口で、結い上げた髪はいまも黒々と光っています。その黒い髪にさした四本の簪の材料は針金です。その


* ゲールツ Geerts, Anton Johannes Cornelis 1843-1883、オランダの薬学者、妻は山口きわ、長崎医学校(現長崎大)教師などを歴任。



カミラが獄中で作った日本人形(スワヴォミル・セヴェリノヴィチ撮影、2008年)

針金だけは強制収容所を取り巻いていた有刺鉄線を連想させ、尋常ではない状況の中で作られたことを物語っています。

戦争の世紀と言われた20世紀が終わり、新しい世紀を迎えて早15年。この世界から戦争やテロは消えませんが、消えるどころかその脅威は身近に迫ってきています。カミラ・ジュコフスカが自分の命を吹き込んだ20センチほどの人形はパヴィヤク監獄博物館の展示室からどんな思いで今の世界を見つめているのでしょうか。



『ワルシャワの日本人形—戦争を記憶し、伝える』
(岩波ジュニア新書)
田村和子 著

ワルシャワのパヴィヤク監獄博物館に展示されている一体の日本人形。これを作ったのは反ナチス活動のため拘留され処刑されたカミラ・ジュコフスカ。彼女はなぜ獄中で日本人形をつくったのだろうか。その人形はいま、何を伝えようとしているのだろうか。

あわせて、ワルシャワ・ゲットー「孤児の家」の院長コルチャック先生と子どもたち、ワルシャワ蜂起に参加した少年兵も紹介し、戦争を記憶し伝えるとはどういうことかを考える。(カバー写真は児玉忠征さん提供)

《新会員のひと言》

私は大塚広介と申します。

私は大塚広介(おおつか こうすけ)と申します。名古屋出身で現在、江別の酪農学園大学に通っています。ポーランドに関しては日本赤十字社の事やヨーロッパで音楽の有名な素敵な国だという事しか解からないのですが、以前ポーランド人の皆様との会話が非常に楽しかったです。このような素敵な人たちがどんな文化で暮らしているのか、日本をどのように感じているのかが非常に気になりました。ポーランドという国にも機会があれば必ず行ってみたいです。

ポーランド語を覚えるのは非常に難しいと思います。それでも私はまたあの素敵なポーランドの方々とお話をして楽しみたいです。私はたった一回でポーランド人が好きになりました。変に感じる方もいるかもしれませんが、インターネットでこの協会の存在を知れて本当に良かったと思います。

もしポーランドの留学生の方々とお話する機会があれば是非とも日本に来て下さる素敵なの方々のお話を聞きたいです。ポーランドと北海道の交流が増える事を心から願っております。

